

「先輩たち大丈夫かなあ？」

麗子の船で、彼女所有のタヒチの島までやってきた中川だったが、困ったように頭をかきながら海を眺めた。

その先には海原が広がるばかりだが、心配しているのは両津率いる男たちだ。

相変わらず無謀にも屋形船で太平洋航海などした、彼らの新たなる無茶にため息をつきつつ、心配しても仕方ないかと婦警たちのもとに戻った。

戻ると、最初は意識していなかったがそこにいるのはスタイルの良い女性たちであり、水着姿である。ブス専などと言われることもあるが、美貌を理解することも当たり前出来る中川は、その女だらけの空間に当てられてしまう。

「圭ちゃん？　どうかした？」

「え、あ、な、なんでもないよ、あははは！　ちょっと船戻ってるね？」

そんな意識をしていると婦警の中でも特にスタイルが良いというか良すぎる麗子に心配されてしまい、目の前にその大きすぎる胸の谷間を見せられると流石に股間のものが反応してしまった。

それを誤魔化すように慌てて、片手でそっと押さえながらその場を離れていくのだった。

その中川の背中を見つめる婦警が一人いた。

——。

—————。

「ふー、みんな無防備なんだからなあ」

船室に戻り一息つき、ベッド腰掛けた中川だったが、そこに黒髪の気の強そうな美女、婦警の早乙女リカが入ってきた。

スタイルの良い身体に水着をまとった彼女は「中川さん大丈夫？」などと心配したように近寄ってきて、その隣に座った。

中川の視線はどうしてもリカの谷間や腰のラインに行ってしまう、そこに集中していた瞬間——。

「中川さん……溜まってるんでしょ？　ずっと女だらけで出す暇もなかったものね？」

「ちょ、ちょっと、やめてくださいよ！」

——リカは中川を押し倒していった。

押し倒された中川は相手を傷つけないように抵抗をしようとしていくが、それも叶わない。

「大丈夫……みんなには内緒にしとくから、私と中川さんだけの秘密ってことで……❤」

「そ、そういう問題じゃ……！」

どうにか抵抗をしようとする中川を組み敷いたリカは、問答無用と言うように水着の下を脱いだら雑に中川の水着も脱がしていく。

あっさりと下半身を露わにされてしまった中川。

「ちょっと、本当にっ……！」

「いいから……❤ ほら、中川さんだっってこんなにしてるんだから❤ 期待してたんでしょ？」

「ちが……あ！」

組み敷かれた中川の水着の下から飛び出てきたのはチンポ。  
しっかりと勃起したそれをリカは舌なめずりして見つめると――。

「ほら、もうやる気満タン❤ このまましちゃうからね？」

「や、ダメだっって！ こんなのは、ああ！」

――それを騎乗位スタイルで咥え込んでいった。  
既に濡れているおまんこで中川のチンポをあっさりと深くまで咥え込み、そのまま腰をくねらせていく。

「あ❤ 中川さんの、あっつ……❤」

「あ……あああ……」

挿入してしまえば流石に抵抗も諦めたのか中川は身体から力を抜いた。  
それをどう捉えたのか、リカは「それじゃ、楽しみましょ？」などと言うとそのまま腰を振っていく。

「はあ……❤ はっあ❤ 彼氏と別れて、久しぶりだからっ……❤ すっご❤」

「うっ……！ はあ……！ あ……！ はああ……！」

髪を振り乱して、腰を激しく上下させていくリカ。

綺麗な黒髪を揺らし、そして腰を振る度に、水着がずれていく。  
形の良いおっぱいが水着から零れ出すと、それもまた揺れていた。  
たっぶたぶ♥と見せつけるようにおっぱいを揺らしての逆レイプ騎乗位。  
もはや抵抗を諦めた中川相手にやりたい放題で——。

「やっぱ、あ♥ 中川さんの、これ♥ 気に入っちゃったかも……♥ 相性、良いのわかるでしょ？  
ね？ はあ、あ♥」

——ガニ股騎乗位で腰を上下させていき、更に腰を落として、チンポを味わうようにぐりんぐりん♥と腰を揺らしていく。

かなり慣れた熟練のテクニックを見せて時折髪をかきあげる。  
何人もの彼氏を作ってきて、それだけセックス慣れたスケベな婦警の本気の腰使い。  
線室内にパンパンと音を響かせていき、ベッドを軋ませる。

「は、あ、このまま生で射精、して♥ 中出し、おっけーだから♥」

「お、オッケーって、そんなのダメに……！」

「いーから♥ レイプされてっ♥ そのまま出しちゃって♥」

そのまま逆レイプからの中出しなんて言われて、流石に中川も再び抵抗をしようとするけれど、それよりも先に自分に限界が来ているようだった。

「あっ……！ このまま、本当にダメだって……！ ああ！」

「っ♥ 射精、ちゃんと、出して♥ あっ♥ 中で中川さんのが跳ねてる♥ 私の中で、あああ♥」

「ダメだって……あああ！」

“びゅるる！ びゅう！ びゅるる！”

我慢をしようとした少しの抵抗の後に、リカの中で果ててしまっていく。

「すっご……♥ 熱くて……♥ はああ……♥」

中出しをされて嬉しそうに恍惚の笑みを浮かべるリカは、片手を自分の下腹部にあてて、そこに中川の精液があることを実感しているようだった。

馬乗りになられての逆レイプセックス、拳句の望まぬ中出しまでしてしまう中川。

ビクビクとチンポを揺らしてリカのおまんこの中へと濃いめの、溜まっていた精液を吐き出してしまっていた。

快感と後悔と、そして屈辱の中、中川は身体から力を抜いてく、いくのだが――。

「こーら❤️ まだ終わりじゃないんだからね？」

「え!？」

――興奮に火がついてしまったらしいリカは一度の射精、一度のレイプで終わらせる気はないと、腰をくねらせていく。

さっき射精したばかりの中川のチンポを更に責めたてての逆レイプ射精をしていくのだった。

リカの行為は、その後しばらく続いていったのだった。